

次につなぐ前向き指導

ワールドスポーツの扉

World Sports



阪長さん

中南米のカリブ海に浮かぶ島国・ドミニカ共和国は、人口約1000万人の小国ながら100人を超す現役のメジャーリーガーを輩出する野球大国だ。なぜ、ドミニカ共和国の野球でスクールの大きな選手が育つのか。そこには日本と異なる意図があった。メジャー3年目を迎えた米大リーグ・パイレーツの

31歳
山本も
るか。
ると考
るのは本
がす。
りの意
めく意
に戦
いを残
教彦

NBA時代の2015年12月、自ら志願してドミニカ共和国のウインターリーグ「エスコヒード」でプレーした。帰国後、「投手のレベルは高く、収穫はあった」と手応えを語っていたが、その言葉通り、16年には打率3割2分2厘、44本塁打、110打点のキャリアハイ

2冠に輝き、チームを初のクラスマックスシリーズ(CS)進出に導いた。

修行を橋渡しした。阪長さんは新潟明訓高で甲子園に出場し、東京六大学野球リーグの立教大学で主将を務めただけに、日本野球とは大きく異なるドミニカ野球は驚きばかりだったとい

う。「彼らは最高の結果を出すために、最高に陽気に、ポジティブにプレーをしていました」。選手たちは試合中、フルスイングの一発勝負など、自分の特長をアピールすることに心血を注いでいるように見えた。その雰囲気を作り上げているのは、監督らスタッフ

の大リーガーも参加し、負けが続ければ監督交代も珍しくない厳しい試合が続く。阪長さんは「日本選手なら『結果を出さなくては』と凡退したり打ち込まれたりしても、不満な表情や態度は出さなかった。ミスを犯した選手には『この先もミスを恐れず、チャレンジしろ』と励ました。

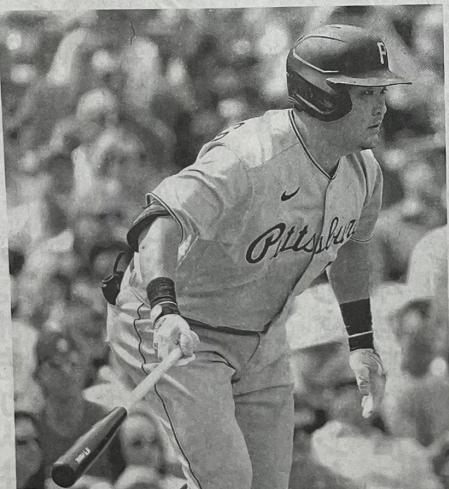
ドミニカ共和国のウインターリーグはシーズンオフ

度は出さなかった。ミスを犯した選手には「この先もミスを恐れず、チャレンジしろ」と励ました。

阪長さんは現在、筒香らを輩出した中学硬式野球チーム「堺ビッグボーイズ」の監督を務めている。日本

では「負けたら終わり」のトーナメント戦が主流のため、守備運勢など実戦的な練習にも時間は割くが、休日でも肩過ぎには全体練習を終えて自主練習の時間を確保する。選手の自主性を養い、けがのリスク軽減に努め、守備運勢など実戦的な練習にも時間は割くが、休

日でも肩過ぎには全体練習を取り組む。「日本野球の指導も、もっとドミニカ野球の良さを取り込むべきであります」。阪長さんの願いだ。



今季も米大リーグ・パイレーツで活躍する筒香=USAトゥデイ・ロイター

△ペーブルース杯

井中崎道端森川△本塁
（五）木（明）

東京

2日

ミニニュース

め、太相撲夏場所（8日）初日、東京・両国国技館

World Sports

京で歳をも同のバセラのせれるの話す。があが、チ一れの